Topic

『はたちの願い』
作文・詩の優秀作品を決定

最優秀賞の築山さん

平成23年新成人を対象に募集した、「はたちの願い」の入賞者を決定しました。最優秀賞作品のみ、下記に紹介します。（作品は、趣旨を損なわない範囲で要約しています）

なお、1月10日に開催した成人式で、入賞者を表彰しました。入賞者は次の皆さん

〈敬称略〉

●最優秀賞　築山ちえ美（安城町）

●優秀賞　杉本ひかる（大東町）、橋本望希（住吉町）、吉里雄太（東栄町）、米倉美紀（大東町）

問▼青少年の家（☎〈76〉3432）

これまでの私、これからの私

築山ちえ美

ここ数か月、二十歳という節目に近づいてきたからでしょうか、大学へ向かう電車の窓から街を見ながら、私の歩んできた人生とは何か、そして、これから生きていく社会とは何か、自問自答するようになりました。

この問いはとても抽象的で、考え始めてもなかなか答えが出せません。しかし、これまでの約二十年間の人生を振り返ると、その答えが次第に姿形を現してくるように思えます。

幼稚園時代のある日突然、私は血液の病気にかかりました。発症直後から数か月の入退院を繰り返し、小学二年生で手術。それから九年程の通院を経て、高校二年生でやっと健康な体になり、現在に至ります。

改めて文章にすれば大変な闘病生活のように感じますが、病気を抱えていた頃の私はまだ幼く、病院が不可欠な当時の生活は、ごく自然で普通なものだと思い込んでいました。

今になると、自分が何気なく生きてきた裏側で、家族がどれほど支えてくれたか、病院の方々が私の治療にどれだけ尽力されたかを想像し、幼かった自分の想像力の無さをとても悔しく思います。

また、精神的にも大きな壁にぶつかった時期がありました。小・中学校では、少しでも自分に不都合な事があるとすぐに逃げ出し、体調に関わらず、一年にほんの数十日しか登校しなかった年も、いくつか経験しました。学校へ行かない日が、一日ずつ重なる度に、周囲の目が怖くなり、そしてまた学校へ向かう足が鈍くなる。そんな悪循環の中で苦しんだことは今でもはっきり覚えています。

しかし振り返ると、私のそばには辛抱強く自分を見守ってくれる両親や、歩幅を合わせるように自分の話を聞いてくれる学校の先生がいました。臆病でずるい私が一歩ずつ前へ進めたのは、周りの人たちのおかげでした。自分の歩んできた軌跡をたどると、病気を患っていた時も、学校に足が向かなくなった時も、私は様々な人たちに生かされてきました。

私は、これがまさに社会なのだ、と今思っています。自分の経験を通して、多くの人間は一人では生きていけない。だからこそ、皆で協力し支え合いながら生きていく、それが私の歩んでいく場所なのだと実感することができました。

これから社会人になった時、自分がこれまで他人に生かされてきたように、今度は私が人々を支え、何かを与えられるような女性になりたいと心から強く願っています。